

## 令和7年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：留萌地区
- 2 事例報告学校名：留萌市立緑丘小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 西 條 直 志
- 4 キーワード：自己肯定感及び体力の向上を目指した組織的な取組の推進

### 1 はじめに

本校は留萌市内の住宅地区に位置し、校区には陸上自衛隊駐屯地や留萌中学校、留萌高校、市立病院などの公的な施設が点在している。保護者の多くは会社員や自衛隊関係者、公務員であり、教育活動への関心が高く、たいへん協力的である。児童数は昭和50年代には500人を超えていたが、少子化の影響を受け減少し続け、現在は各学年1クラス、計119人の小規模校である。児童は明るく学習意欲も高く、友達関係も良好であるが、自己肯定感が低い児童や基礎体力が不足している児童が多いことが課題となっていた。

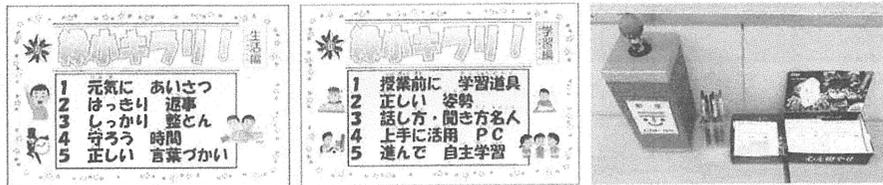
### 2 自己肯定感の向上を目指した全校的な取組

#### (1) 取組の背景

本校は昨年度の学校スローガンを「自分で決めてトライ！みんなでもっとチャレンジ！」とし、自己決定の場を数多く設定し、その積み重ねを通して自己肯定感を高めることを目指してきた。しかし、12月末に行った児童アンケートでは「自分によいところがある」という設問に対し、「あてはまる」と回答した児童は55%にとどまり、期待した結果は得られなかった。

#### (2) 実際の取組

そこで、今年度は、学校経営案にPBIS（ポジティブな行動介入と支援）の理論を取り入れた「緑小キラリ！による認め合い」を提示し、教職員全員でビジョンを共有した。これは、問題行動を減らそうとするのではなく、望ましい行動を増やすことで、結果的に問題行動を減らしていくという考え方である。本校では、望ましい行動（キラリな行動）を設定し、日頃から児童同士で意識的に見付け、認めたりほめたりすることで、自分に自信をもち、自己肯定感を向上させることができると考えた。



「生活編」は、これまで「緑小スタンダード」として提示していたが、「スタンダード」では、できて当然として認めるに値せず、できていない子への否定的な指導が増えがちになると考え「キラリ！」に再構築した。また、「学習編」は、これまで月目標としていた「学習のポイント」を整理し「キラリ！」とした。児童たちは友達の良い行動に気付くと、校長室前のカードに記入し、



提出していった。校長室前に掲示し、毎月の全校朝会でも紹介することで、校内に浸透していった。さらに、学校側から一方的に示すのではなく、児童が考えた「キラリ！」の方が、より実態に即しており、意欲も喚起されると考え、分掌の児童活動係に児童会役員による「友達編」の作成を指示した。これにより係の教員にとっては学校運営参画意識が高揚し、

児童にとっては、より自分事として取り組めるようになった。また、児童会役員が全校児童への紹介動画を撮影し、校内で放送するなど、当初の想定以上の広がりをみせた。

### 3 運動環境の整備による体力の向上を目指した組織的な取組

#### (1) 取組の背景

本校のグラウンドのブランコやジャングルジム等の遊具は老朽化のため、長期間使用禁止となっており、休み時間に外遊びをする児童はほぼ皆無であった。新体力テストでは、C評価以下の児童が全校の6割を占めるなど、体力の低下が課題となっていた。

#### (2) 実際の取組

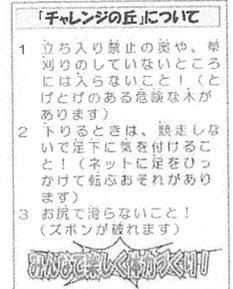
このような状況を踏まえ、外遊びを促し、日常的に体力の向上を図るため、グラウンド横の「チャレンジの丘」の活用を計画した。この丘は数年前に造成され、小学生が登るには適度な勾配であり、眺めのよさも兼ね備えていた。しかし、雑草や樹木が生い茂り、遊びに使える状態ではなかったため、再整備することで、外遊びをする児童を増やすことができるのではないかと考えた。また、その際に様々な分掌や教職員が関わることで、学校組織機能の強化や各担任の体力づくりへの意識も高めることができると考えた。

まずは、教職員に対して、この取組の目的や計画について説明し周知を図った。教職員の中には、外遊びをする児童の減少を危惧している者もあり、おおむね肯定的な理解を示した。教頭にはこのエリアが土砂災害警戒区域に指定されていないかの確認を指示した。また、事務管理部には登る際のロープ等の購入や斜面の草刈り、健康安全部には、健康委員会の児童による遊び方の紹介



動画の作成、各担任団には、外遊び励行の声掛けを指示した。

使用上の注意も作成し、利用を開始すると、すぐに多くの子もたちが休み時間に丘に登って楽しむ様子が見られた。また、それに付随して、大谷翔平選手から寄贈されたグローブでキャッチボールをする子、サッカーや鬼ごっこをする子、雲梯や鉄棒の練習をする子、虫取りをする子など、グラウンドで元気に遊ぶ子どもたちの姿が見られるようになり、日常的な体力づくりのきっかけとなった。



### 4 おわりに

「緑小キラリ！」の取組を始めてから、児童アンケート「自分にはよいところがある」の設問で「あてはまる」と回答した児童は7.1%増加し、「進んで運動したり、体を動かしたりして遊んでいる」の設問で、「あてはまる」と回答した児童は1.9%増加した。

これらの取組により、自己肯定感と体力づくりへの意識が着実に高まっている。今後も児童が、予測困難な時代をたくましく生き抜き、ウェルビーイングを追求しながら夢や目標を実現できるよう、校長として研鑽を重ね、マネジメント力を高めていきたい。